

重修真書太閤記

三編 七

和	書	門			
一	六	三	一		
二	〇				
一	〇				
冊	架	函	號	類	

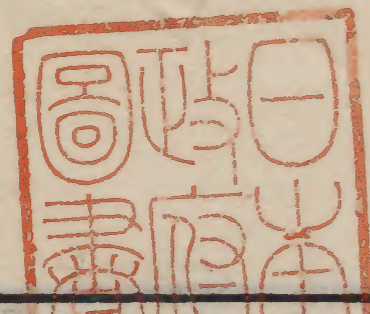
庫	文	閣	内		
七	一	一	一		
函	冊	架			
一	〇				
一					
架	冊	號	類		

内閣文庫	
番 號	和 16221
冊 數	110 (27)
函 號	171 39

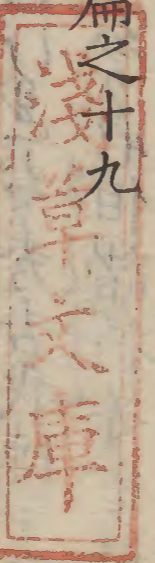


糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

町田久成獻納之章



重修真書太閤記三篇之



城兵等寄手の陣と乱妨乃事

并諸將等再度本陣を圍い事

楠七郎左衛門正具計策より八田乃押えり
ける佐久間右衛門尉阿閉淡路守同萬五郎五千余騎
夜討の爲に散りて打ちおこし本陣を長島門徒ホの
不意乃乱入小騷ぐは信長旗本の侍あまて敗走
城攻の諸將等まてり本陣へ馳歸りしを大河
内本城の責口三方とも大將との人者おこ空慮とあり
り城兵等時あそ来りたりと打て出寄手の構たり

太閤記三篇卷之十九

鹿垣を引破り陣を乱妨り、西方乃陣を
かき、柵木一本拔き、叶い、結句城兵數十人討死
せり、理あるか、佐久間氏家安藤等が代り、遊
軍木下藤吉郎秀吉三千余騎、守り居りしを
知て寄けり、不運なり、本陣、夜討の入りし
諸將周章、走れ、馳出りしを秀吉あし止め、中
本陣何れぞ騒ぐ、面を請取の責口、さら
捨走り出る、甚以、然る、その跡、城方、急
急度陣を亂妨、用心、諫め、戒め
も耳にも聞入らば、出行け、秀吉我陣を堅く戒め
る、兵士一人も動く、か、れ、但諸將等、本陣、馳

行、我一人行ざらんも、讒言の種、一人本陣へ赴く、手乃者三十餘人を引連
い、本陣へ、竹中半兵衛淺野弥兵衛兩人
陣中を守ら、置たり、爰、小於、城兵等、寄手の陣
を、濫妨、西方へも攻め、竹中半兵衛軍慮
よ、か、あ、名士あ、三千余騎、三ツ、別、鉄炮を
配、用心、嚴、相待、ゆる、城兵等、西方を、
破、得、あ、鉄炮、勇兵等、小突
伏、手負、死人多、早、城中へ、逃入、
竹中半兵衛討取つ、首ども、本陣へ、持を遣、
信長還御、あ、御覽、あ、味方の兵士

等夜討に襲るを疵と蒙るもの多く敵を討つもの
一人も形なくその上八田乃押えし差置まじし勢とて散
く小敗走し船江乃寄手も敵に謀らまじし引返し其
上城の四方攻口乃その共本陣の見舞に来りし跡まじ
陣を濫妨せしと柵鹿垣を破られし中小木下り手
るのり首尾を合せしと神妙なり奇代ありと賞美
ありし重祿く宣ふ様是れ石山本願寺の門徒等り
所為なり當國を平均あしと後直に摂州へ進發し
石山を責落し顯如父子を生捕彼門徒共を悉く打
滅しその鬱憤を散まじしと罵りしを諸將りし
まじし口と鉗くかしあま折し木下御前へ參上し

大將の善悪あくまはしを賀し終り諸將を向ひ本
陣乃騷動を聞き馳着あまし尤のこまが前以
て君り仰付置まじし掟に因り面く預りの責口を
退るあましき筈なり然るも思慮あまし退るあま
本陣に馳来りあまし城兵とも能く思ひ面
の陣へ濫妨せし本陣あまし本陣の守護あり殊に明
智光秀の衆ありいり火急の變ありともまか君
御一人を警固あまし奉るあまし事めくをきや
まし又まのく本陣へ見舞あまし自身く預りの陣
処に備を乃あまし某も今少しやく
參上仕る筈に筈あまし西方を道遠くまじし手

大將の善悪

勢も少くゆの急あまを引分ちさんこと難儀ゆゆと
 彼是心配仕り役所の守り油断あき様中付ゆこと
 あく大小暇どらやうく只今馳参りてゆと申あぞ
 諸將りづとも赤面しく詞あく信長より一向長島
 門徒乃加勢ゆ急と怒らる瀧川一益の兵を分與へ急
 よ長島を攻させ門徒等を切尽し夜前の恨を散
 とどまきをのぞと宣ひしをも秀吉のたく諫めしけ
 らる彼等が狼籍と悪くゆともと決しく石山
 ふうの下知しあひまは長島を門徒等乃私の計
 儀のあま処あまを必定八田の捕ら謀る處に相違
 あらまはゆゆゆの證據を申しゆべし八田の押あはゆ

佐久間陣へも加勢と申しゆゆ彼輩参着仕し
 ととの夜城中より討ち出ゆことぬく謀を合せし
 證ゆい正具いふ智勇拔群ありとも押の兵士五千余
 人新手の加勢も五千余人あをせて一万余人の中へ
 をづりよ五六百の勢少く切ら出らるべきや然も加勢
 乃来まるその夜討しゆと實も捕ら相圖のゆゆ
 ごとく知まてゆとあま何の好のゆゆと石山上人
 より當陣へ大勢の援兵を下らるべきや援兵を下らる
 好あく何とくまゆ夜討の濫妨ともあまゆべきや
 じに當陣の門徒捕正具ありと名乗しゆゆ石山より
 乃指揮ゆゆとあまゆゆゆゆゆゆゆゆ抑正具深

大隈公談三編卷之十

本願寺を信し故に君の御憤より石山へつらむを
さしん爲よ正具う身よ引受しと覺えしゆくを弥石
山上人乃知たること小いゆを以然るよ君石山上人ゆ
り怒らざるもつて神速よ長島へ軍兵をさし向む
りあましきと楠めよ謀られぬこの淺智をあつて
道理よ依り此始末をその終よさし置き唯本城
を落して國中平均を專と思召されし一船江の
城と申も只今急よ攻拔きあふよ及を以大河内を
落城仕らるその餘の枝城一日あつても保えや
さや即日よ降参仕るをさし免角御心を決せし
と大河内を攻潰さるべきと云上さしかを信長

聞食本城を落さんといふ論あましきと良もよ仕
八田船江の奴原妨とあつてさし先是を除んぬ八
田小押と置船江を責つる味方利あつてあまし
夜前のさし心外の始末よ及べう然るよ
置大河内を攻め必定今度乃て死妨げあふ
角八田船江とをのまに捨置んと宜しとあまし
どその上大河内急よ落しあつてその間小兩城を
責落し大河内の援を断べしと仰らさしけつと秀吉
謹くさしけつと謀おつて一人の兵をも用あべし
いんや一城とや如斯かよて責はをむらんよ何
れでも味方は勝利ありつてさしや兩城を御心の

更に攻落さしゆとも味方の兵士と多く損しゆ
 べし就中船江ハ格別八田の城小於くハ容易ニ落城
 仕すべく覺ゆいつきも且兩城ヲ押えと置をら
 ひとて本城小向をせ給ふべくゆきまて船江八田
 の城を責あふハ俗の中ハ負腹立すく却てく楠免
 又笑をさゆべしと申にゆき信長りゆめと宣ひゆる
 ハ五千の兵士にて押ととて押えりゆべし八田乃城之
 事と手固く押えんとあふ凡人数一万余人を用ふ
 べし徒らとやゆめ兵士を押しに置まんとゆり只一時
 責小責伏方然とてあふと秀吉押しゆべし八
 田の押多分の兵士遣らゆめ及ふ拙者手勢の

すら五六百人も遣らゆめ事なきゆめ船江乃城へ
 も千余も遣らゆめ事闕しゆめ大勢を却て
 然るゆめと言上と信長いゆめ不審とあふゆめ
 いうゆめ小勢を以て押えんと云ゆめ備立覺束
 ありと仰らまゆめ水々下畏りゆめ軍の道と
 虚實の二つと機と臨と變と應とて計と善と仕
 ゆめとゆめ言上仕ゆめ殿も知召まゆめ処ゆめ
 八田の城と先と五千と以て丈夫と圍居るゆめ
 味方の實道少ゆめ然るゆめ楠免ゆめ五六百と以て
 討破りゆめ敵虚道を用ひて處ゆめ依て只今五
 六百乃弱兵を以てゆめと押えゆめ味方の虚を以

て敵の實よりある道理不ゆ正具知深く謀ありて慎
 厚き兵士より大軍の仕損たるその跡へも
 の勢よく向ふものと尋常のこころいひ申す
 一定奇策ありて城方を偽引ものと知べく左も
 その二の町の謀と案ト得どハ勿く打と出るとい
 こまを考得ゆらん五六日の隙と費とを
 何どの隙ハ本城を攻落し一ハ虚實變化を
 活用仕る兵家乃極秘の詞と理とを
 信長得心より然る宜しく計らるべしと許
 秀吉西方の陣に立歸りその内より五
 百余人と擇出し松原内匠永江半之丞兩人を大将と

ふ一方便を委碎し中舎光八田の押え小差遣をば
 船江の城へも塙九郎左衛門を大将とふ一千余人
 を信長より差向らし諸城攻乃諸將を前れ
 責口小向とむ柵鹿垣を丈夫と結らし先西方へ
 佐久間安藤氏家を遣らし木下といふ旗本へ
 呼返し遊軍とふ諸將一同は城を向ひ此度
 之城を攻落し陣とを乱妨を断し鬱憤を晴さん
 そのしと勇氣と含んて備え

織田殿軍評定乃事

并木下明智諫言の事

船江籠城の輩へ織田勢新しを加え大軍小て嚴

攻立し、隨分防禦術を尽し、始終叶ひか
たく難儀と思ひしに、信長の本陣一向門徒等、狼
籍して以乃外又騷動を以て寄手をもめて退散
せしむる城兵と蘇生の思ひを以て悦び勇むと
いへども再度大軍を寄来り如何なる暴戻の
振舞をあらんぞんと恐怖するも今度こそつら
一千余りの勢小く押来り只遠く守り居るを以
ておのふり城中その意を以て油断をなすも
先差當り急を以ておけし暫息を休めてける者
まゝ八田の城を楠正具が謀成就し思の儘に當
敵を追拂ひしに本城の圍を一旦退去と

を後誥及るに船江の寄手をも退きしと實は十分
乃勝利ありと悦喜限らず士卒の功勞を賞美し
夫と又恩賞を與へし本城を援け謀略を工夫
しける処小織田勢又く押寄来り城下は陣を以て
備を立るとしども其勢を以て五六百は過ど隊伍
も定まらず四度計りしに、駈出を蹴散すとべ
しと城中乃若武者勇むるを正具自身櫓小上り陣
くと望見し味方を制し決して打出るとあつら
ひ敵乃小勢を侮むるに鹿忽ち振舞して敵の謀
又落されれば後悔ととも詮あるに五千の勢小
く押えたりしに敗軍を以てその跡へ五百計りし

向ふく不敵なる小太も陣列備への錯とるる態
と破と安けよ見きうけ味方を偽引謀とつるも
知れしものあるを輕くと打く出ぬを一定悉く捕
まらぬと又幸に打勝たりとも味方何やどの
益うゆべき既又前夜思乃まふ勝利を得よとバ此
度と慎く守るるを處と知べし惣と十分禍の基
形り盈バ損といふことあり必勝利は募るるに
固く制止を加へけよと城中よと押えの兵士を見
もまぬとてたて用心怠とる守り居けり斯と
大河内の本城の寄手等東西南北の谷とて責上
り乘破んと勇然とて城中の兵士等銳氣撓とる粉

骨碎身して防ぎ戦入を以て敵味方の討死手負
まことあきとも乗入るる間を得と只徒と戦ひ暮
して八月下旬より十月中旬よ及ぶ手と替術とを
して責とても落城とてき体もあし寄手も今を
攻め退屈とて見えたりける信長諸將を
集先評定あきとも施とてと方便も形りとて斯と
宜くんと言上とる者も形り信長大息繼で宜く様
我漸尾州二郡より起つて遂に美濃尾張伊勢江州
と切從へ五畿内を平均し將軍家と守護し奉りし
後諸國乃動亂と鎮め四海一統静謐よ歸せり然ん
とて心掛あがらるる大河内の城一ツ小數萬の

勢と起し五十余日と費してその功立とてかゝかく
 てと諸國の名将勇士の籠つたる城と何とて落
 し得るべきや所詮運と天と任と七萬の惣勢を以て
 四方一同の責懸て死亡といとるべし勝負を一擧め決
 るべしと宜ひげるとき木下藤吉郎進み出さるど
 御心と苦めあふ及を以當城を圍てとるづり五
 十余日おりの間と城落とて殿乃引矢の鉛き
 とチホもあふび兼て聞食及をさしこもむべし
 中國乃尼子晴久雲州富田の城と楯籠毛利元就の大
 軍と引受合戦七ヶ年小及べり是と富田七年の籠城と
 今も世と沙汰仕るよゆをひや

尼子晴久と京極大膳大夫高秀の五男尼子五郎左
 衛門尉高久六代乃孫父の民部少輔政久祖父の伊
 豫守經久おりの晴久初と三郎四郎詮久と云永正
 十一年二月十二日誕生と永禄三年十二月廿四日四十七
 歳とて卒し富田落城と永禄九年七月六日小
 て晴久乃嫡子三郎四郎義久乃代ありさるは富
 田七年の籠城と晴久卒後の事と知べし
 然ども毛利元就名將たりがゆゑに憤怒を起さる一
 度も麓忽乃軍を以心静小守りつめ終と義久と追
 落し雲州と切取たり
 永禄十二年ハ毛利元就七十三歳いまも現存あり

然るに我君漸五十余日の間小勲功ありと云之憤
怒を發し一も一程ふくいで諸國を征伐ふくも之を
や要害よく能士多く楯籠り兵糧矢玉藥沢山ある
城に向ひ容易く落さんと思召さざりしと恐る多き
中條よりして近頃御早まう少やと存い又如斯城を
無休に責落さんとあしむる若干の士卒を損し
一假令城を落し得たり共股肱と頼りせむ士
卒を失ひしゆ何の益りゆべき日數乃一年二年を經い
とも味方を損ぎ鋭氣を落さば軍威を盛より
ゆへ敵とのつら勢疲し降を請り自滅するり二
の間を出でし殊に死生を顧りば無二無三に責む

んとハ殿乃軍法を他人小計り知しむる種あり
も勿体なくい能く備と立置聊も御憤怒の氣色あり
緩くと攻さむ御本意乃如く御手小入し當
城の体を見ゆ小最早格別御隙入すまうといや
和融乃義より一國全く御威光は服しゆさんと鏡
うけく見えゆと諫めりあは信長聞食尤の
おろく大軍を發し征伐乃たあ来りしをめり城剛
とて此方より和を求めんといあまうは輕忽とい
べ籠城の兵士は嘲り笑ふれんも無念なり此
方より和睦をふさんとからい國司方は利を付
調ふまうとて敵は利を付あは味方乃諸軍勢

出陣せし甲斐ありき且此以後我下知し従ふ
 然と當國平定とるとも隣國乃輩の聞んと手
 前も耻らむと宣ひしは秀吉云く此方より和睦
 と望むはあはれ國司は利を付る及は當國一圓
 殿乃御下知し従ひ武威まどく國中は溢るは自
 然と仁政は靡きゆ一とるふりこの休む和睦
 と仰出さるる然とる一先味方の威を示し敵
 乃心中と怖し一先味方は大河内乃城中の士どもそ
 を角も籠城して開運ととき期おきとて知て諸
 侍の眷屬各々身構し遁とん道を求む一とる
 と怖しあふと勇ありんを救しあふと仁にあり

勇ある殿もたさか立ちむひさきあまを行ふ
 小方便あや秘中の秘とてゆふとて言上しはと明
 智十兵衛光秀かさるるに侍りしが進と出さる
 様木下殿乃異見尤も聞えいふも大河内乃要害
 乃城世は多くはゆふとるの上累代乃國少く兵
 糧箭玉藥沢山あると齋藤あどの及ぶ処はゆふ
 然と毎日く鉄炮のちり合はれど誠小無益と覺え
 いを多く諸將乃攻口を少し引下り城より撃し
 射出と箭鉄炮を避し先此方より更と攻むと
 ねく緩くと對陣かゝるも木下やさく如く富田
 七年の籠城小毛利元就の勝利を得られしと同一

かくく 覺山 富田の軍ハ其浪入して中國を經廻り
 頃形まば委細に見聞てゆひし元就さか古兵乃智
 者あまご敵を様くごか反間の謀をて互に相疑
 かろめりつやと小いりし城中一致をと大将乃下知
 かく諸侍心にてありし戦さにて利を得るあり
 るく終小ハ義久夫婦別小出城とれ共累代の家人
 郎従られと警衛とる小及を以要害らき名城も敵
 乃手小渡りてい當城堅固なりとも富田より過
 ゆる元就の軍略は習るをを忽に落城仕
 べしと取合をたしは信長より悦ををひひと
 小かく長陣を張上と百日二百日及ぶとも何の障り

うわるべき但城中反間の方便ありや否と問をを
 光秀承て其いさか謀之き便宜らるべ工夫仕り
 と見ゆべしまら敵城乃勇士と味方小招き若招
 應して来てゆをいハ敵乃手とわうとあまを誅し
 中べしとやしつと木下聞と能も思付ましもの哉
 拙者も左あまふも多小富田乃事と出してゆ
 去れり國隔て人心同ぶか元就の策と一般も
 察るゆし思慮を練るべきと肝要ありとやしけ
 と光秀聞て臨機應變乃教あり時と所の差別心得
 てゆとやまらる秀吉大感と尤左様あるべし
 ども殿乃御爲は寸志を述てゆらる貴邊の心中た

おもしろく然る何乃危きとみゆりんやと申すの謀
小のらせむと諫然し信長も喜ぶと喜ぶ
あつて随分首尾よく堅固なるのりゆくと仰出され
けりゆり光秀も面目を施しかしあつて退出
と諸將りつと役所へ引入て乃らの便宜を待
おけり

重修真書太閤記三篇卷之十九終

重修真書太閤記三篇卷之二十

明智光秀謀計を行ふ事

并野呂左近逆心忽小被誅事

大河内乃城強く織田乃大軍數日あつて圍
攻は共兵士乃損亡乃多くて城中弱る氣色も見
えどあれは依り信長諸將を集め評定ふりあつて
神速なるを降とせき策もふり木下明智さへ
これと諫然し信長聞食早く行ふべき由を仰ら
言上ふり信長聞食早く行ふべき由を仰ら
けり光秀畏り我陣に歸り郎等奥田を召出し謀

織田と大軍あり始終保つとぞうゆいけしは終よ
の面と同一く討死せんを必定あり信長の勢破竹
の如くあれは四海を切鎮せんとも遠うり然此人
小随う身と安泰小過さやと了簡一則返書小
仰越ふ趣一理又當りて覺えい某もうぬく左と
おをひゆとも是非あく一族とも一統小斯くして
の罷在ひ日夜身くの安危を考へ心も心あはひ然ふ
小御邊の懇書を得て闇夜又明光を得たるごとく御
芳志近頃忘さかなく存い然いふく御差圖は従ひ
同志を招きゆくべくい去りて此度乃義貴邊の懇志
乃るもや又ハ織田殿もその心よておるゆとよや貴

邊の懇志を疑ふいあぬとも織田殿の御前と思
ひゆく故又只今了見決し得むいとを記したり奥田
あの書と見く光秀に見きかへ明智大悦び則織
田殿の内意おろして光秀乃奉書とてたため奥田
渡しおの奥田中私書状と添降叅實儀といふ
神妙の至おろして織田殿の御内意如斯と件の奉書と
送るる數多の金子を與へるどよ左近いふ心迷
ひゆく奥田を頼るいおるもや箭文中でも及
まひひをかい持口より使の往来をかいたる
野呂左近と文徳天皇の源氏あく勢州多氣郡五
ヶ條山の城主野呂越前守乃一族あり一書小阿坂

水戸書三編卷之二十一

合戦の時誅をらむと云ふ

光秀の奉書奥田が書状小添たる黄金忽小反心を醸しけるふらう左近何卒城兵兩三人とよと先織田家へ降参の土産よきんものどと肝膽を碎き誰彼と思ふらう小真虫谷の二の持口を固めらう山木左馬助を語らうらやと竊小彼所よりたり織田家へ降参の事を相談せらうたりける

宇多源氏

渡會郡一の瀬御所の侍臣山木左馬助氏定とらう左馬助心中小備いあの男敵方へ心を通し我を引入んともとらうそのありと察し偽つて悦びの休をかし

某も左あそ有べしと思へども然るべき便宜あると一日くと黙止しけりと答へか左近もや同心き

と悦喜し奥田書状明智奉書まて取出て見せけるふらう左馬助もと悦び如斯便のあり上事既小成就し我ま一兩人勸むべきものあり王井兵部朴木隼人と某と竹馬といひ入魂者あれと語合らん小否といふ云へる此書状を以て勸めらう誰とも同心しと云きあうとせけるふらう左近誠と思ひ書簡を山木小らうらあそ無基けし左馬助を件の書状を懐中し直小本丸小昇り野呂左近逆心を企く寄手小内通し味方の諸士と語合ふと既

水戸書三編卷之二十一

如斯このごとくに捨置すておきまわ御大事ごだいじに及びおよびししに但多たくたくたく
侍と語合課ごごごをを思おもひひ某なも一味いちゐ乃の体てい小
ををそそふふ斯この有あ證書じやうしを欺あざき取とりてていと國司くわんし父子ふしへ訴うへ
けけままへへ不ふ智ち齋さい入い道だう子し息いき信しん意い大だい小せういいろろ憎にくきき左さ近ちかう
振あ舞まううふふ急いぎぎ呼よ寄よ誅しつ戮りやくよよととくく家い老らうをを集あめめ評ひやう
定さだめめりりげげたたいいづづとも山本やまもと左馬助さばすけうう忠ちゆう誠じやうとと感かん野呂のりよ
が逆心さかごころを怒いらりり早さうと誅しつををらられれととんん何なにあるある禍わざはひをを引ひ出だし
べべととくく山本やまもと左近さちかを捕とらへへ来きままききとと下した知しききれ
たり左馬助さばすけ即刻しやくじつ野呂のりよ持口もちぐち又また行向ゆきむかひ玉井たまゐ朴木はくもくととは
漸語しぜんご合あひひきたきたりり何なにも御邊ごへん小對面せうたいめんととんんと望のぞむむ早
く来きりりく打合うちあひひををいいへへ左近さちか何なに乃の用意よういもも形かたちく山

本もとと同道どうだうして持口もちぐちを出本丸しゅほんまるの口くちを過するるああるる數多あまの兵へい
士し走出い声こゑととををりりとと左近さちかを搦なめ捕本丸とらほんまるへ引立ひきだ行ゆ
一應いちおう乃の拷問こうもんも及およびび早速さうそく首くびを刎きたりりけけるる借後せきご
左近さちかり家来けらいともともを悉ことごとくくめ取とりりその代しろととて山本
左馬助さばすけとの持口もちぐち小置せうちきたり實じつも歴代れきだいの主恩しゆおんを忘わすれ
北父きたふ祖親そしん屬ぞくの慈愛じあいを棄すてて只ただその身みの安穩あんゑんを祈いのりりけ
ふ天罰てんばつののややととををおおそそろろけけ斯有この後國司ごこくし乃家
老鳥屋尾らうりやび石見守いしけんしゆりりるる野呂のりよ敵てき組ぐみにに付つて敵
を討うちちべき謀まうありりたたとと野呂のりよ持口もちぐちへ寄手よてを偽引いつはりひ入いら
ハ寄手よて何なにの思慮しりゆも及およびび定さだめめるる来きりりその時思このときしふ
俣また又また討取うちとりりハ心地こころちよよめめるるととちちびびるるふふりり國司くわんし父子ふし

大に悦び早く山本左馬助とて野呂の手跡を學て
書翰と認るを是と寄手の陣へ遣り玉井兵部儀
田彦右衛門等面々の勢を率い山本小力と合さん
と合圖と定めて待つたり此時寄手の陣中ふく
ハ明智光秀野呂左近が音信を待詫て如何きと
やらん遠くしよと案じ居る処へ左近が許り書
簡ありとて遅くと披きしれは同士の輩も彼是相
語ひいよ降参仕るべくい去り一寸の功もふく
参陣仕らんと面目形くの間某持口より御勢を引入
真虫谷を御手小入し然る御勢并は御檢使の方
と忍びやう御入し某手初の功は城内の御案内は

べしとて書たりけり光秀みれを見く甚悦び急き
信長乃御前へ罷出野呂の書簡を以てふくくの由
と言上り御勢を彼持口遣りしと望し
ける信長暫時御思案ありてその諸將を召出され此
事如何ありきと評定ふしあふ小本下藤吉郎明智よ
むの御邊り計る処疎畧ありしをいしを此書簡
乃趣いさか疑惑あり野呂左近同志と語ひ降参實
儀形をばし人質を送りたる然るべき士と使節小立
べき小左はかく只謀計の手段と申入初参の功とふ
と遣りしと能く御勘辨ありて然るに數年の

籠城と申にもおろし城中の銳氣いささか壯あり容易
く降参せんといふやどのをの左まで多くとありま
しとあり一方一味方を引入とせと皆殺しとて笑んと
乃謀おもも知るべしと今一應野呂が中とて御聞ゆ
く後ふてを遅らしと申しはふらと信長何さあはも
ありかん然らば軍勢と遣はしと止め野呂とけし先
降参同志乃者の人質を送りしと申し遣はしとてその
返答より又此方も手段ありと仰出さしけ
るより光秀も口惜くおをへとも木下り中処實に
も道理至極ありと達し野呂が書翰小從をせしめ
とて勸免奉らんと即時は右乃趣と答遣し早と人

質と出さしと申しと促しけしと城中案は相違し如何
と云ふと評定ありと申しを偽つて人質とありと云
ふのもおろし諸と此方乃計策漏れしと然らば野
呂が書翰を疑ふ侮りがさし織田の軍勢やといひて
更にお返答小及を以光秀いふと云ふと書翰
と送りつとて何乃返事もなく諸を偽つてあ
らしとておをへ心中いふと穩形は佐久間信盛と
うたふ光秀が勢をありとて一貴攻んと申しは佐
久間も然るべしと同心し光秀が謀は任せてゆけり
てけり

加附言三終者之二十

十兵衛尉光秀謀計相違の事

并秀吉敵兵と捕え拷問乃事
明智十兵衛尉光秀と野呂左近が誅せられしを知と
度々書翰を遣はしつゝともその返答もきけりしと
と憤て事の實否を糾さん然西方の寄手佐久間
右衛門尉持口をとり手勢五百余騎よて一攻責んと
行向ひりし佐久間をとり明智と入魂あはれ快
く持口をかりその上より勢を引分援兵とせりしか
光秀悦々自身真先小進と真虫谷より責上り一乃
持口よと寄短兵急よきり付ひしか野呂左近小
對面をんと音信けりとに城中少て先度送る野

呂り書翰乃計相違をしとと悟り持場を固めて
用心嚴しき処おぼしきとていふも鉄炮を放り
木石を投りしを戦ひりしが山本左馬助寄手の奴
原の膽を潰させ笑るゝとて野呂り首と鏝乃先小
貫き堀の上より差出るとに左近と對面せり
いひて城中一度又唾と笑ひしか光秀郎等おりしか
奥田と呼んく是を見きりむるも野呂り首と相違ふ
けしは儲の降参りと顯れ誅せりしとて同爰
乃持口代りて味方を引入んと計つりしをのあふしか
てを如何小責るともその詮あふりし重と工夫し
責破らんものと思ひけしは士卒とほとせり引退

大関記三編八之二十

き本陣へ参上し面目も形も言上形も信長心
中小秀吉軍旅又鍛錬を感ずるも且光秀
遺恨あうらなため側近く召寄らる左様の所
行向ひ汝ふれぬを士卒を損を引揚りあそ尋つ
ぬのものを大敗軍と云うるものと宣ひ
光秀いれぬ面目を施して退出し何卒一乃謀を
勘考落城ふさし死んぬものと肺肝を苦しめ又
木下藤吉郎奇計多きをありし何卒一乃城
兵五六人と生捕をとりおまひ信長へ内意を告て秀吉
北方の寄手坂井右近齋藤新五郎等陣所
又行向ひ密に謀を示し合を城兵を虜んと約し

川廣坂口の味方獅子垣の外へ伏兵を置計ひしべ
定免秀吉手勢を國人の如く出立を寄手乃陣へ夜
討しつて休むをてふし城兵を囲き出さんと謀りその
夜寅の刻過曉近頃寄手の陣にて火乃手燃上ふ
とひしし俄に陣を騒動し夜討入ると呼ぶ
関を作り鉄炮を響りせ乱れ合て戦ふたり城兵是
を見てよもや寄手の陣へ國人等が夜討を覺へ
たり此方より手と合きて助るも此手の守護
鳥屋尾左衛門尉水谷刑部俄に兵士を下知し持口乃
木戸を開き切き出寄手の柵鹿垣を引破らんとあ
ひつるを寄手の陣中いふ騒動に戦ひ合を盛んと

本陣記三編卷之二十

見えしかの城兵まうとく力を得押詰く鹿垣の際廻
る処を見よとゆ一寄手の陣中より相圖の鉄炮とふ
らふ伏置る坂井齋藤の勢一度も颯と起り立
城兵と差をさみて攻立まば寄手の陣中の騒動の急
止とひとく打出三方一緒に攻けよと城兵大に敬馬さ
備と敵乃謀めてありけり早引と呼そつ周章ふ
た先き逃上るを寄手の兵士等追うけく兼て下知
とくとあまの疵を付るよ及そひ十余人を生捕り
たり坂井右近此勢に乗る附入の附入つと勇
るを木下堅く制して難所は行掛り敵方の鉄炮矢玉
よ防がふと八道とがさきものをあう今日乃働元敵の

兵士と生捕んが為なりをそや此儘小引退べとゆに
そ坂井も止しとを得ど追捨ふと陣中へ引返すと秀吉
生捕の兵士等と召具して陣中へ歸り一人を引出し繩
と解酒食と饗食應り金銀とあと言葉を和げとゆ
りや大河内城中諸士乃人質をい何処よかろ置つる
よや汝等知たふ有のやにやへ左あは猶恩賞を
施して歸さるるとさぬとふとか一向に一向よ
存せんとて告る者もあり又は其処其処に隠置由り
者もあり互に區とあう五人うち口は一同小て更に疑ふ
へくもなりよと秀吉あの上尋問ふよ及つととて十余
人の生捕共よ夫と褒美と與陣中よ留置藤吉郎密

小信長乃御前へ出く生捕の者共の白状を由と言
上と國子父子乃北の方一族歴々乃妻子共々多藝谷
乃館小ある由籠城諸士の妻子、臍ヶ窪の奥よりし
置旨慥々相違なく此等の方便を以て落城せ
せしめしや上にて信長大小悦ををひ早く其方
便を行ひしと仰出されり爰小明智十兵衛光秀を
數多の金銀を損失して城中へ反間一野呂左近を
殺し、外小あまをといひ、仕合も形、面
目も、謀を廻ら、功を立ん、の
と思へども更々、工夫も、木下藤吉
郎城兵と生捕て人質の在処を尋問き、趣を聞出

一密小その實を探り知急度思案しける、城中諸士
乃妻子を奪取し、れを餌し、降参の輩を釣べし
左の、は自然と落城し、及ふ道理ありと勘辨し、信
長へ此旨を言上し、及へ、信長木下を先とし、明智を
旨を以て評定ありける、小秀吉や、小明智の勘辨
さし、一、一段、く、聞えし、を、今、し、思慮
乃足ぬ所あり、當城の強きを、あ、要害の、故
乃、小、を、あ、籠る處の諸士、を、國司の一族、を、
譜代恩顧の古兵、を、一命を國家乃存亡に、ほ、せ
君臣主従一致を、故、を、然、を、し、妻子を奪は
し、を、を、さらの恩愛、を、ひ、れ、忠義の心を、變、り、

へさや妻子を奪取いそいめく必死と知りまほしく
堅く籠城かゝるべし野呂左近の金銀も迷ひし志は
つきて一味同心とるもの無くて城中諸士乃勇あり
義あることを知食べし君數萬の大軍を以て攻詰
合戦乃術尽て諸士の妻子を尋出し押えて降参さ
せんことを謀り未練の所爲といをれんも口惜か
べし國司家の侍い妻子の愛子溺あつと知りか
んと高言いそつことを聞惡のそし然らば妻子を奪
取んと近頃思慮あつて似くい某敵兵子人質妻子
乃在処を拷問仕ゆと奪取せよ爲すといを以別よ所存
のあつたといはゆその計策的中やべとや否とのつづく

ゆとを的中やさごとと味方乃損ふを知らずは
さかると少くはづ行ひ見ゆべし去とて明智の思ひ
ふらさしと妨ぐあつたあつて一應の所存とすま
でふいと申せしか信長聞食木下乃中条中づ聞え
たりその通て行ひゆさし秀吉乃計しとあつし
形くは光秀うおをひふつ如く計らひゆくと仰られ
しかる明智も爲方形くまづ秀吉うちむと小従ひ
けり

重修真書太閤記三篇卷之二十終



大岡記三編卷十一

重修真書太閤記三編卷之二十一

重修真書太閤記三編卷之二十一
（以下は非常に淡く、ほとんど不可読な筆跡である）

重修真書太閤記三編卷廿一

木下智謀多藝谷の館と乗取事

并織田殿大河内城中へ使者と立る事

木下藤吉郎秀吉おのひ付する謀ありて城兵と生

捕國司おのび諸士等の妻子とわら置所と糾問な

くく多藝谷のどくある由と告げしは是天の授る處よ

く伊勢平均の奇謀とありひ定めやうく生捕との

甲冑と脱と秀吉の手より忍ぶあれらる兵十三人成

撰出くあもと着せ國士の兵士の體とありひ多藝

谷の奥ある國士の館へ忍むて路案内と伺らせ処々あて

大岡記三編卷十一

大隈言三編卷十一

の謀略といひあぐめ首尾と見合一兩人の立歸り容子以
知せしむとぞ下知しけふ實もこの十三人の事も馴れた
る者共ある夜ふもるれ多くの敵の中と一のびく難
あり通り越館の案内筋道のつまりすて伺せよ一三
人の木下の陣へ立歸り始中後とちもあつ告り
めを秀吉あつび此者共謀と授け多藝谷へ歸り
のち秀吉この由と信長へ言上り多藝谷を襲ひ國
司の簾中諸士の妻子と奪ひ取んと十月廿日の夜も
よとよと三千餘人と引率し彼処に押寄ける抑あ
多藝谷といふ処は大河内本城の東南ふあつり尤險岨
の切処あり國司不知齋入道あつ館と營造簾中を

一め姫君公達とあめあつ遊樂の休息とに要害
絶景の處るまとも不案内のりなたや至る地
あつ然るに秀吉倒の忍びて入て路次と探りられ先
たてて五百餘人この谷隨一の難所と越り岩と傳ひ忍
む上り多藝の館の右に林の茂るに置残る
兵二十五百餘人と谷の本道より押寄廿一日乃夜
丑の刻に兵糧つるをせよとつ曉んとするあつ龍藏庵
の尾崎と廻りて攻上る多藝谷の如き切所あつ
とも國司の親しと方々の御座処るれ一族の大河
内宮内大輔森本飛驒守と大將と一二千餘騎よ堅
めり秀吉元よりめるとと伺ふと妙と得られい

大隈言三編卷十一

あも方便く國司の親戚と奪ひ取んと専ら軍
ハ左の心で入びたり義勢をうり真先に進む段々
攻上りて夜も明るのとなりしあり木戸口は押詰
関の聲とあけ鉄炮と打懸けりふりこの頃城中
て何の口も軍と止りたり對陣して居けり馴今日
めく近くと攻来らんと思ひもあはれ殊更あ口の嶮
岨あくと不知案内のりたやと来りてあはれ
おのれう心あはれ許しめ籠城のそとめり一度
も敵の寄りとあはれ自然と用心も嚴重あはれ
油断とて処ふ木下り勢寄来りし驚とてけり朝
霧あはれと寄手のめりも見分らる城中以外の外周

章一とて敵の寄りと俄に弓鉄炮鎗と大刀よと騷
動せしめられも要害もけり急よ木下勢を衆入とて
もば坂の下みめつづのを見て見へりふり森本大河内
さひり下知とて手別とて矢玉とて防戦
ひり秀吉元より敵を驚かし味方の勢と感んよな
城中の銳氣と挫く策あはれ谷に向り関とつらと
樹木と叩く聲と揚げるふり勢のめりも見えり
ぬ霧の海のあるめり合ひあはれ
もあはれこの時木下り置る五百餘人の兵士
等ハ夜中より閑道と經り切処と凌り城中へ込入拾
三人のとの共の案内とたのめり二手に引分戴百五十餘

本朝記三編卷廿一

人の樹木の岡に伏せり二百五十餘人の案内に兵士成
先立ち國司親戚の忍びひける館の後めいり合圖
の時刻を待ける處より大手の合戦をやりと見え大
勢あめと叫ぶ聲聞え館宿直の兵士等も大形大手の
持口に向き働さるる体を見せしめ今日ぞ天の授時
あともやと勇を悦ひ我先あと館の内へ乱れり出合も
のどバ切倒し館の奥へ進み行敵のふせをゆるりあ
るおそしませと方便り國司の北の方より一族諸
將の妻子從類一人も残さばあるひの輿あるむの復輿
あさのせ奪ひ取りぞ走り出ける
國司權大納言具教卿入道して不知齋といふ簾中ら

六角彈正少弼定頼朝臣の女とるらち左中將信
意卿の母堂也

あゆみの侍女半婢あき叫び狼狽あはりけるを追立
追立まへて三十餘人と召具して引取りて大手の戦
む急あめと鳥屋尾水谷あんととせしめ歴々をみあせ
と知れ防も戦あむとふ館の方俄に物さるりく聞
えし何を何事やらんと大に驚き馳付んとありあ折
節館の後乃樹木の岡より火燃出暫時の間は大火とあ
り餘焰天と焦し城兵の方へ吹付ゆるあぞ鳥屋尾水谷
大に驚きあめと何事ぞやと周章あめと兵士の
散乱せむと大方あめと且館の安否と氣遣急し駈

大陣言三編卷十一

付んとおのへとも煙と火氣と犯さる進むとあさつたさ
も要害堅固の持口あり守兵乱れ合防く者の備定
あさつた右往左往と敗走せ木下あれと見せまあり手
勢と励まありととや攻入時あるを早乗や兵ともと進
多けしむべしとや切らる運兵岩と傳ひ堀を越せりくと
込入城兵どりのうらうらと切伏突伏追廻り内
ふり木戸を関り味方を招きりれ惣勢一度は乱入
一無二無三は駈立けるほとよ城兵ととらぬの數
らば鳥屋尾與左衛門水谷刑部心むらうへ猛けきや
も敵の勇氣壯み味方多く討きしめを防戦をか
るばるの体ふ打あさる本丸さうと進退るるに

此口忽破を寄手十分勝利を得木下藤吉郎館
の内へ打入り落残り女性足弱の老若といわり介抱
然る人々とうらと供ある本陣へ引返さこの外
切處は伏置し木下の手の者へこの館と乗取守護
けるの本丸より大勢打り出るるを防戦ととらる難
儀あるべしとありひ俄に柴築地と築く聊油断を
丈夫と持固めり叔父と信長の本陣よてこの間敷
日の城責ふしと仕出たりたるやとのともあり散不
快の処木下う手あり多藝谷と乗取國司の北の方と
しめ諸大將の妻子と棄取し心地より秀吉の勲
功他も異ありと大に感しむひめらる當城落去の事秀

大陣言三編卷十一

吉の籌策^{ちゆうさく}に任^{まか}ざるへきとのめ^めて之^{これ}を爰^{こゝ}に於^おて秀吉^{ひでよし}即^{すなは}等^しともと呼^よ集^あめ此^{この}館^{たね}堅固^{けんこ}に守^{まも}らるゝその身^みハ本陣^{ほんじん}にいり當城^{あたりに}と攻取^{せめと}へる手段^{しゅだん}と言^い上^あると路^{みち}以^もて急^{いそ}ぐ四方^{しやうほう}に持口^{もちぐち}と守^{まも}りて取巻^{とりまき}居^ゐる寄手^{よしで}の面^{めん}に事^{こと}ありあはれ遊軍^{ゆうぐん}の秀吉^{ひでよし}も多藝^{たげ}谷^やと乗取^{のりとり}を何^{なん}れも面目^{めんめい}と失^うせて見^みへたりける就^{すなは}中^{ちゆう}柴田^{しばた}佐久間^{さくま}ハ日頃^{ひぐら}秀吉^{ひでよし}と不和^{ふご}するもより明智^{あけち}ふ功^{こう}と立^たてると思^{おも}ひつゝも光秀^{みつひで}の謀^{まう}と共相違^{ともごご}して其功^{そのこう}あり木下^{きのした}却^{かへ}り如斯^{このごと}大功^{たいこう}と顯^あるも色^{いろ}の面^{めん}より味方^{あじな}の勝利^{しょうり}と悦^{よろこ}ぶといふ心^{こゝろ}ふもあはれと嫉^{ねた}む快^{こゝろあ}とむび然^{しぜん}るも秀吉^{ひでよし}本陣^{ほんじん}より信長^{のぶなが}の前^{まへ}よりみ合戦^{あひせん}のしめ終^{しま}ると言^い上^あしてのちゆける様^{よう}今度^{いまど}大河

内の奥^{おく}ある多藝^{たげ}谷^やと乗破^{のりやぶ}り國司^{くにじ}の簾中^{まゐら}でとて諸^{しよ}將^{しやう}の妻子^{しよし}と奪取^{うば}りて籠城^{ろうじやう}の兵士^{へいし}ハ勇氣^{ゆうき}と屈^{くつ}味方^{あじな}に十分^{じふぶん}の威勢^{いせい}と募^もる此時^{このとき}はあはれ君^{きみ}の御仁心^{ごにんしん}と顯^ある御使^{ごし}と城中^{じやうちゆう}へ遣^つはされ奪取^{うば}り簾中^{まゐら}以下^{いげ}といふを送り送^{おく}り歸^{かへ}り和睦^{わくぼく}と進^{すす}めらるゝ國司^{くにじ}を云^いふ及^{およ}びその手^て乃^{すなは}諸^{しよ}侍君^{しやうきみ}の御軍法^{ごぐんぽう}と感歎^{かんとん}し中心^{しんしん}よりやうとて服^うしに急^{いそ}早^{はや}く御使^{ごし}と被遣^つはされ然^{しか}るべしとてめけるふあり信長^{のぶなが}聞^き食^くその方^{かた}千辛^{せんしん}万苦^{まんく}と漸^やり奪取^{うば}り人質^{にんしつ}と直^ちに送^{おく}り歸^{かへ}さんといふも殘念^{ざんねん}ありやまの簾中^{まゐら}以下^{いげ}と止置^{とど}國^{くに}司^し父子^{ふし}和睦^{わくぼく}をば送り歸^{かへ}せりと宣^{のたま}ひけるを木下^{きのした}諫^いめゆける簾中^{まゐら}以下^{いげ}と止^{とど}めらるゝ君^{きみ}の仁心^{にんしん}顯^あるれとてゆ

質とて和睦と進めむと彼必妻子の愛みひうそ國
 の大事と誤とてやまらぬ鋭氣と勵むべし然るも木下思
 慮あさらし君の簾中と當陣中へ供奉しめまこと
 信長さる此興の軍と好しゆらび依る簾中以下と送り
 歸しゆらとて但軍の道は直とて以て貴とて徒ふ士民と
 疲らし國中と惱ましんより兩家和睦し合戦と
 止めたりんせのさめ人のたを安泰の基あるべしとやく
 嫉妬の怨念と翻つては順和の同心と起されしと仰遣
 さるるも進め奉りけるにより即前田又左衛門管
 谷九右衛門と使節とて奪取する人質とてを送り
 歸させてたり

國司父子信長と和睦の事

并勢州平定信長凱陣の事

此時大河内の本丸に數十日の籠城あり諸侍大將
 より兵士に至るも勇氣撓まらば防戦秘術と尽しけり
 と城中いさも弱る氣色と見せは然る國司父子悦び
 いささ居らる處計らび當城第一の要害多藝谷
 と落さる刺へ國司の簾中とて諸將の妻子と奪取を
 言語道斷の次第ありしつれも力と落しあさ
 せけるあり國司父子も大小周章しめし恩愛離
 別の傷悲歎ふせあり如何とて仰天まし海しける
 處へ信長の使者來りし簾中とてめまて多藝谷

大内言三編卷十一

て棄ひ取す一女性幼雅こわうの人ひととて送おくり越こふる由よしと告つげりよあり誠まことにありとされとも人ひとを出いしとこれ瓜見うらきしむるも實まことに國司くにしの簾中れんちゆうとあり諸將しよしやうの妻子さいしに相違さうゐふりきたり取次とりつぎの兵士へいし本丸ほんまわら斯々しよしよと中達ちゆうたつを國司くにし父子ふしその意こころと心得こころえさとも簾中れんちゆうの無事ぶじも還かへりかひ一嬉うれしと門かどと関かり信長のぶながの使者しやと迎むかえ入いりけるに前田まへだ又左衛門尉まひのや菅谷すがや九右衛門尉くゑのや本丸ほんまわらのり國司くにし父子ふしも拜謁らいえつとんとを望のぞむより國司くにし不知齋しじ入道にんどう對面たいめんありければ前田まへだ菅谷すがやもつ使節しせつの禮らいとありさそちけるに夜前やぜん當手たうての侍大將しやくたしやうふ木下きのしたと申まをす多藝谷たぎやと襲おそひ國司くにしの館やうてに乘のりり破やぶり御簾中ごれんちゆうとてしめ奉たてまつり諸侍大將しよしやくたしやうの内室うちむろ以下

棄すひ取とり事軍じぐんのあり進項しんかう無據むこ儀ぎありていあかあかあは是こゝ是全ぜんく信長のぶながの本意ほんいといふに因より供奉くわんぷし外との方かたもとて送おくり歸かへり奉たてまつり抑おさし信長のぶなが元もとより北畠きたはたけ乃御家ごけも少すくも怨恨うらみありし軍兵ぐんべいと發はつり御城下ごじやうは陣じんをとりゆくと國郡くにぐんと棄すちんちん為なりて去さりあり室町むろ將軍家しやうぐんけ三好みやうの為ために襲おそちとささめを不慮ふりも早世そうせいさしあしけるのち今いまの將軍家しやうぐんけ義兵ぎへいの御旗ごひと揚あげらるるに信長のぶなが速すみに御味方ごみかたも馳かり參まゐり忽たちまちに凶徒きゆうとと誅ちゆうし難なんかゝ室町むろ御所ごしよと再興さいかうあり奉たてまつり事天下ことてんか普知ふち所しよありそのち五畿七道ごきしちどうの間まに任にんり國郡くにぐんを領りやうする輩たぐひのつちも馳かりて將軍しやうぐんも拜謁らいえつし奉たてまつり然しかるも當家たうけ王城おうじやうと去さり

本朝記三編卷十一

大内記三編卷十一

遠く々伊勢國に住居ありて將軍家へ些少の會
釈せしものありありとびいんや將軍宣下の賀せしものやこと
を偏ふ三好合体の逆臣と同一と振廻てありて信長
いふも將軍家の台命と蒙りその罪と糾さんる為
ふ進發せしむる處あり然るも尋常小籠城とありて
ふと以て斯の如く合戦と及ぶあれ併將軍家台命と重
んせらるが故ありこととて國土靜謐と萬民安堵ありて
むへき本意ふしを聊も不義無道の業とありては其の
為小簾中以下諸將の内室たち悉く送り歸りてありて
ちや前非と後悔ありて將軍尊崇の禮と厚く領
分安全の思と定めありて此迄度の合戦より矢の義

理ら顯くも無益と士卒と滅びて百姓と傷ありて
ありて信長と和睦ありてありて信長よ
ろくく京都へ執奏仕り北畠の家首尾愛度様小
計らひて新國司御前より肥満の御病よ
て御出仕も御難儀のあり承り及ひて信長り次男
茶釜丸と進らせり新國司の妹御と御養子とあり給
せりて配とて御家督とありて京都の出仕と勤とせ
らるるべ次第と繁昌の基とて信長決して非道乃
事とありて御疑念ありて若又御得心
たの勇氣と頼ませり籠城ありて運と天とありて
是んと御事ありて是非ありて但將軍と

大内記三編卷十一

敵も引受させ給ひ我々と責手とあり幾程あつたを
 めも能く御思案あり御返答承りゆき申す申す
 るふより國司父子前田管谷段々の芳志辱ら由と申
 するはいづれも一族即從等と評定して後返答よ及ぶ
 由より兩人と別席を請ひ種々饗應して國司父子
 一族即從うち集り評議あしけりしは籠城して
 年と經るとも信長を打取るとの術有へしと思はれど
 又隣國よりころころ敷後誥の便宜もあり一度二度寄
 手と打破るとも味方馳加る勢あり敵は日あつた夜も
 もあつた勢ありを圍らち密やうな蟻の如く出へし透間
 もありゆき遂に信長の為小攻落さる家督滅亡せ

んとよも遠り然らば信長の申さるる旨も從ひ和睦と
 ろり結び給ひあは差當り軍と止めて國民と安泰あり
 その上籠城の兵士も一先休息して再生の思ひとあり
 急ぎ前田管谷兩人へ此むゆと御返答然りと勸
 めけるもの多あり國司父子も此意も同心りやうと
 兩人と呼迎へ朴木隼人と引合を信長の本陣へ返答の使
 み立ちまされ信長も直に隼人と對面あり隼人謹て
 申けるは信長の懇志と以て城中一同蘇生ていと莫大
 の仁心と申すべしその上木下り為し虜とあり國司の
 内室以下送り送り返さる異國あり本朝あり
 いゆその例とて此一条と以て信長の御志の如と

大略記三編卷十一

と感心仕り御禮の詞と知れその上は將軍家へ御疎畧やせ
一罪科輕めづればも御恩ふり赦免あるべき由實も
優曇の花より得る心地一は是等の所厚御禮中
上の様や付ていと言上しけは信長も喜び悦喜ま
し御使者と篤く饗應し給ひのめり織田掃部
助と使とて城中へ遣はるはしめり和睦の盟約と結
とせられ

織田掃部助信正、彈正左衛門尉信定の三男備後守
信秀の弟あり尾張春日井郡樂田の城主あり
國司父子も大に悦ひいひ約束と堅くして既ふ兩家の
和睦調ひしめ信長四方の寄手も下知し軍勢と引上

させ給へ諸將士等承り皆持口と退る田と解る本陣一集
りたる爰み於て信長岐阜の城より茶釜丸御曹子今
年十二才あり給ふと呼寄城中へ送らせ給へ國司父
子も心と安ん一則不知齋入道桂瀬山の陣小信長以
請て對面の儀式首尾能調ひしめ江城中の軍も國
司の下知よりて城を開き給へ故信長國中と平均仕
置あり給ふ不知齋隱居の身たるを以て大河内と退去
ありと茶釜丸小龍川三郎兵衛尉柘植三郎左衛門
尉

龍川三郎兵衛尉雄利へ北畠一族木造左中將俊
茂乃三男ありめら僧とあり現常院法印といふ然

るふ北畠の家風日々衰ふるをて兄左衛門尉具
康の家老柘植三郎左衛門尉と謀り織田殿に從
ひ此年大河内攻の案内に後還俗に龍川一益
り名字と請取龍川兵部少輔と改め茶筌御曹子
家督たりし時三郎兵衛尉と改め天正四年北畠
家滅ひしに叙爵し下総守としに織田殿亡び
終ひしに太閤に從ひ羽柴とも名乗りし也
その外織田家の侍多く後見のため付らば船江の
城にそのを十萬石と領せりしその外に織田掃部助
や南伊勢五郡の惣奉行とて茶筌丸と守護させ
一男三七郎に關一黨の大將とあり五萬石と領し

神戸の城に住し龍川左近將監一益に北伊勢の奉行
元の如く尾州西方長嶋と無帶をのけてのち勢州
平均ありけるより信長八田の楠正具より奇策謀計と
設けし味方と苦しめしこと憤り終ひての次八田
の城を攻落し正具を誅せりしと仰らるるを木
下承なるのろくや宥め楠とて勢州國中の名士とや
へん多尤賞翫あるに存ししとよめるの如く御和
睦ありし御曹子御入國のころに御曹子の御とめみよ
侍りしけしとやしとてあてはし上りのを信長快く
思召ぬと大功の木下うち昔に從て終ひけるあり木
下八田の城に向む楠と國司父子和睦とのに國中の支配

大附言二終卷十一

そとて織田家より取行ふとありてとて御邊ありとの
ゆゑ心得ありてとてとて達しあるは正具承るる大
歎息しつらとて度々信長と苦しめし者也今日子細か
く和睦ありしものち必対の事ありて罪をわんと疑ひか
しと信長の胸中に見透し八田の城と落て攝州へとをのり
石山本願寺の寺中へ駈入難髪して門徒乃中ありて素
よりける信長との由と聞あひしゆと楠と憎ませる
とも為方ありけむと怒りてあつとて勢州あり直上洛
ありて將軍家あり拜謁ありあひ北畠家和睦勢州
平均とて由と言上ありあひしゆと將軍家あり御感あ
りあひ長光の御太刀と下さし信長ありはのてあれ

そとて参内し禁裏の御普請と見分しゆと油断か
く出精の様とてふり渡さし霜月十七日京都と發
足ありて濃州岐阜へ帰陣あり
織田家譜よ此年十一月千種越して上洛ありあふ
とあり枚谷の善住房の信長とてくりしも此時の
とて云千種ハ勢州三重郡より江州蒲生郡田津畑
へ出る道あり

重修真書太閤記三篇卷廿一終

